

主 題：渴きは潤いをもたらす
 聖書箇所：詩篇 63篇1-5節

「一寸先は闇」、そんなことばを私たちはよく使います。先に何が待っているのか私たちにはわからないから、まさにその通りです。人生がどれだけうまくいっているとしても、一晩寝て次の朝目が覚めるとそれまでの幸福がすべて消えているようなことが起こったりします。ヨブという人物はまさにそのことを経験したことを私たちはみことばを通して知っています。私たちの人生がすばらしいものになっていると感じているその時に、私たちはその足元を掬われて痛い思いをすることがあるのです。ヨブのようにそこに起こる事柄は、愛する家族の死であったり、財産を失うことであったり、ときには自分自身の健康を失ってしまうことであったりします。そのようなとき私たちが感じることは、何の希望もない砂漠の真ん中に一人ポツンと置かれてしまったような、どこを見渡しても砂丘ばかり、泉もなく緑の木もない、そのような状況に取り残された感じ、または、アリ地獄にはまり込んでしまってどのようにもそこから出ることができない、そのような思いを抱くかもしれません。そして、そのような時に私たちが感じるのは神を憎むという思いであったりします。そして私たちの周りの人たちは、ヨブの妻がヨブに言ったようなことばを投げかけます。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか？神をのろって死になさい」と。私たち自身、こんな状況ではもう死んだほうがまだ、神は私のことなど愛していないのかもしれない、こんな自分が生きていても仕方ない、早く天に行こうと思ってしまいます。けれどもヨブはどのように答えたでしょう？「あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか。」と言って、もう失うものが何一つない状況にあっても神をのろうことではなく神を礼拝することを願ったのです。それゆえにヨブは言います。「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」と。

今朝私たちは、私たちが体験する人生の様々な困難の中であって、どのようにしてヨブのような信仰を持つことができるのか、神をほめたたえることができるのかという、その秘訣をごいっしょに考えましょう。しかし、今朝はヨブからそれを学ぶのではなく、同じように様々な困難を経験し、苦しみの中にあっても神をほめたたえることを決して忘れることがなかったもう一人の人物ダビデのことばを通して、この秘訣について学んで行きます。彼は詩篇の63篇の中で、人生の困難の中にあってもどのような態度をもって神をほめたたえようとしていたのかを、私たちに教えてくれます。そして、この学びから神が教えてくださることを通して、私たちがどのような状況にあっても神をほめたたえることを忘れないようになっていただきたいと願います。

63:1 神よ。あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。

63:2 私は、あなたの力と栄光を見るために、こうして聖所で、あなたを仰ぎ見えています。

63:3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを賛美します。

63:4 それゆえ私は生きているかぎり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります。

63:5 私のたましいが脂肪と髓に満ち足りるかのように、私のくちびるは喜びにあふれて賛美します。

☆困難の中で神をほめたたえることができる秘訣とは？

1. 私たちは神を求めなければならない。

なぜ私たちは神を求めなければいけないのでしょうか？それは神が一体だれであるかを私たちが知っているからです。この詩篇63篇を正しく理解するためには、ダビデがこれを書いた状況を知る必要があります。歴史的背景です。この詩篇のタイトルには「ダビデの賛歌。彼がユダの荒野にいたときに」とあります。それは何時のことでしょうか？二つの機会が考えられます。一つはサウル王に追われていた時代と、もう一つは自分の息子アブシャロムに追われていた時です。後者が63篇の背景です。なぜなら、11節を見るとダビデは自分自身を指して「しかし王は、…」ということばを使っているからです。サウル王が生きていた時代には、ダビデは自分のことを王と呼ぶことは絶対にありませんでした。

このアブシャロムとのやりとりはⅡサムエル記15章に記されています。アブシャロムは人々の心を勝ち取り、ある日ヘbronに行って自分が王であることを宣言するのです。その知らせを聞いたダビデは、人々のところがアブシャロムになびいたのを見て、自分の都である愛するエルサレムで戦いが起こり、その都が壊されることを望まなかったがゆえに、また、自分のいのちを案じたがゆえに、慌てて荷物をまとめ、側近たちと都を後にして行くのです。その様子が描写されているⅡサムエル15章を見ると、それがいかに悲しい出来事であったかが分かります。15:30「**ダビデはオリブ山の坂を登った。**

彼は泣きながら登り、その頭をおおい、はだしで登った。彼といっしょにいた民もみな、頭をおおい、泣きながら登った。」と、彼らの口には賛美がありませんでした。皆が悲しみの中にあったのです。自分の息子が反旗を翻して、自分を殺して王位を奪うために計画を図り、今まさに自分のいのちを狙っていると、そのことに気付いたからです。愛するエルサレムで神を礼拝することがなくなり、この先どのようなになるのか、その不安、苦しみの中でダビデは涙にくれていたのです。この時期にダビデはこの63篇の他にも二つの詩篇を書いています。3篇と7篇です。3篇のタイトルにはアブシャロムの名が出てきます。7篇にⅡサムエル記の内容を照らし合わせると、7篇にあるベニヤミン人ということばがダビデをのろったベニヤミン人を指していることが分かります。この二つ3, 7篇の中でダビデは自分の心配、不安を神の前に表わしています。しかし、ダビデはその不安の中であって神による解放、救いの確信を得ていました。そのことが3篇の中にも表われていました。3：8「**救いは主にあります。あなたの祝福があなたの民の上にありますように。**」と。そして、この63篇はこれら三つの詩篇の中で最後に書かれたものです。この後、スパイがエルサレムからやって来て、ダビデにアブシャロムがどのような行動を取るのかを知らせる記事がⅡサムエル記に記されているのですが、その直前か直後にこの詩篇は読まれたのではないかと考えられます。このような背景の中で、

☆ダビデはどのように主に求めたのでしょうか？

1) **ダビデは主を覚えた。**神がだれであるのかを忘れなかったのです。ダビデのことばを見ましょう。「神よ。あなたは私の神。」と。この「神」ということばはヘブル語では「エロヒム」ということばが使われるのですが、これはイスラエルの主である「わたしはある」という「主」ではなく、すべてのものの神であること、だれよりも偉大なものであることという意味を持ちます。創世記1章にはこの「神」ということばが繰り返して使われています。すべてのものを造り、すべてのものを治めておられるその偉大さ、すばらしさが強調されているのです。詩篇42～83篇では「主」ということばの代わりにこの「神」ということばが多く使われています。そして、これは私の神、私の個人的な神であることを意味する「主」ということばと同じ意味で使われています。全世界を治め支配しておられる神はまた、私の個人的な神でもあるという意味です。ダビデが忘れていないのはこの神のことです。「あなたは私の神。」と言っています。「私の神」というヘブル語のことばは皆さんもよく知っていることばです。イエスは十字架の上で「わが神。わが神。…」といわれましたが、このことば「エリ、エリ」です。個人的な所有、個人的な関係を現わしています。ダビデは自分の息子にいのちを狙われるという状況の中でも彼の偉大なる神との関係を忘れることがなかったのです。すべてを支配しすべてを造りすべての人々の神であるこの方はダビデの神だということです。このような確信は常に私たちの心に安心を、静寂をもたらします。このダビデの確信は彼が知っていた神との関係、決して変わることはない、決して悪い方向へ進むことのないその関係に対する確信であり、この確信は彼を賛美、礼拝へと導いて行きます。興味深いことは、この63篇の中にはダビデが苦しみや悲しみをもっていたと思わせることばが何一つないことです。だから、背景を知らずにこの詩篇を読むときダビデがそのような苦しみの中にいることは分かりません。なぜなら、ダビデの焦点はそこにはないからです。彼は私の神がだれであるかということに心が奪われていたのです。彼には心配や苦しみがありましたが、神に祈ることによって、神を思い出すことによって彼は確信を得たのです。私の神はすばらしいお方、私の神は私を救うことができるお方だと。それはパウロがローマ8：31で教えた真理です。「**神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。**」と、ダビデはそこにたどり着いたのです。神がだれであるのかを知ったのです。それを思い出しそれに心を留めたのです。そして、その確信は彼に何をもちたのでしょうか？

2) **ダビデは神を切に求めた。**「**私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。**」と、他の何よりも私はあなただけを願うというその切なる思いがこの「切に求めます」ということばです。ダビデは自分のいのちが助けられることを求めたのでしょうか？詩篇3, 7篇では彼は自分が助かることを願っていたことを知りますが、彼が第一に求めたのは「私はあなたといっしょにいること」でした。彼は礼拝を求めたのです。渴ききった砂漠の中で彼は神にある本当の満足を求めたのです。「私のたましいは、」「私の身も、」とダビデは霊的な充足だけでなく、彼自身のすべてが神との交わりを心から持ち望んでいたことを私たちは知るのである。こらからどのようなことになるのか分からない不安と反逆の息子への思いで葛藤の中にあつたダビデがその中で最も願ったことは神への礼拝だったのです。そして、それが行われている時、彼は神との正しい関係を保ち神が最善をなしてくださることを知っていたのです。イエスはそのことについて山上の説教の中でこのように言われました。「**だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。**」(マタイ6：33)、この通りのことをダビデは行ないました。ダビデが求めたのは、苦しい状況からの解放ではなく心からの神への渴望でした。神がだれであるのかを知っていたがゆえにダビデは神を求めました。私たちも同じようにそのような状況の中で

神を求める必要があります。私たちは「私の父よ、私の神」と祈ります。ダビデが個人的な関係をもっていた神は私たちとも同じように個人的な関係を持ってくださっているのです。私たちを愛して贖ってくださった神、その神を覚える時、私たちはダビデのような態度をもっているのでしょうか？

2. 私たちは神をほめたたえなければいけない。

神がどれほど私を愛し慈しんでくださっているのかを知ったなら、私たちは神をほめたたえずにはおれないのです。神はどのように私たちに接してくださっているのか？この63篇は原文では1～5節が一区切りになっています。なぜなら、1節には渴望があり5節には満たしがあります。その渴きが満たされるのです。つまり、1節と5節は対になっているのです。そして、2節と4節は神に対する礼拝が記されており、しかも原文を見ると両方とも同じ単語で始まっています。これも対になっています。そして、3節はダビデがこの1～5節で最も言いたかったことなのです。このような形はユダヤ人の詩の形式、表現方法です。ダビデは1～5節を詩的な表現としたのです。

☆ダビデはなぜ神を求めようとしたのでしょうか？

3節にその目的とその目的の理由が記されています。そして、その目的を達成した結果が2節と4節に記されています。まず、その目的を見ましょう。「私のくちびるは、あなたを賛美します。」、これが目的です。なぜダビデは神を求めたのか、彼は神を賛美したかったのです。神を礼拝するために私はあなたを求めますとダビデは言うのです。ダビデは王座から追われるような理由は何もありませんし、息子からいのちを狙われるような理由もありませんでした。これからどうやって行くのか全く不安に満ちていたダビデでしたが、その彼が願ったことは神を礼拝することでした。「私のくちびるは、」ということばはその礼拝が心の内側だけのものではないことを教えます。口をもって人々に告知知らされるものなのです。ダビデの礼拝はダビデの周りにいる人々に語られていたのです。礼拝はどのような状況にあっても捧げるものです。私たちの生涯において私たちの心は多くの場合、自分のしたいことをしようと願います。自分に何か良いことがあったから感謝の気持ちで礼拝するというのは、神が求めておられる礼拝ではありません。神がだれであるのかを知っているから、私たちはどのような状況であっても礼拝を捧げるのです。それが人生の目的であり、私たちが造られた目的です。

その目的の理由は何でしょう？3節の初めにあります。「あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、」と。「恵み」ということばは訳すのが困難なことばです。その意味が非常に深く広いからです。現在の聖書学者の多くはこの「恵み」を「契約の愛」と表現することが多いのです。日本語の聖書では「誠実、あわれみ、真実さ、愛、」と訳されています。この神が与えている恵みは、真実で誠実で満ち溢れていて絶えることがなく、変わることがなく、優しさにあふれ、あわれみにあふれ、どのような状況の中でも私たちに与えられ続け、私たちが疑いを全くもつ必要のない愛だということです。なぜこのような愛を神は私たちに与えるのか、それは、神が私たちを愛すると決められたこと、その契約に基づいた愛だからです。ダビデはこの愛がどういうものが良く知っていました。実際に神はダビデと個人的に契約を結んでいました。そのことはⅡサムエル記7章に書かれています。（「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。」7：12）。ダビデはこのことばを使うことによって、神の変わることをない永遠に与えられ続けるそのすばらしい契約の愛を思い起こしたのです。この愛はいのちにもまさると言います。この神の愛にまさるものは何ひとつない、それが私の所有物であるから彼は礼拝したかったのです。この神の愛をもっているから、私たちはどのような困難の中にあっても喜びをもって礼拝するのです。

そして、この目的を達成した結果は何でしょう？2節と4節にあります。2節では過去のことを、4節では未来のことを記しています。日本語では「…います。」と現在形で書かれていますが、原文では過去に起こったことであることが分かります。また「聖所で」とあるのは、逃げて来る前、エルサレムにいたとき、ダビデはそこで礼拝していました。それは「あなたの力と栄光を見るため」でした。あなたのすばらしさをもっと知りたいから、あなたをもっと正しくほめたたえることができるようになりたいから、あなたを礼拝したのだと言います。4節には「それゆえ私は生きていくかぎり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります。」とあります。ダビデは一瞬先がどうなるのかわからない状況に置かれていましたが、あなたの恵みはいのちにもまさるゆえに、私はあなたを礼拝します、それを誓いますと言うのです。私たちが正しく神を理解し、正しく神との関係を持っているときに、私たちは神を礼拝したいという願いを持ちます。スポルジョンという一人の宣教者はこのように言います。「もし、私たちが私たちの状態の中に喜ぶ理由を見出すことがなかったとしても、私たちは常に主にあって喜ぶ理由をもっている」と。それが私たちであり、その信仰を实践したのがダビデです。神を求めるゆえにダビデに起こった行動は礼拝でした。私は今までと変わることなくあなたをほめたたえたいと、その決意をしたのです。神を覚える時私たちがこの決心をし、実践して行くはずです。

3. 私たちは神を喜び続けなければいけない。

5節「**私のたましいが脂肪と髓に満ち足りるかのように、私のくちびるは喜びにあふれて賛美します。**」、私には満足があるのだとダビデは言います。この「**脂肪と髓に満ち足りる**」ということばは、当時のイスラエル人にとっては最高のごちそう、すばらしい食事であることを表わしています。ダビデは何もない砂漠の渴いた地であなを求めますと言ひ、あなたを礼拝したいと願ひ、そして、礼拝によってほんとうの満足を与えられると言うのです。本当の満足は周りの環境に支配されません。どのような状況にあつても神を正しく礼拝することによって本当の満足が得られるのです。そして、満足は喜びを生み出します。だから、ダビデは言ひます。「**私のくちびるは喜びにあふれて賛美します。**」と。パウロは「いつも喜んでいなさい」と言ひました。これは命令です。そのようにしなさいと教えるのです。ダビデもいう通り、神を礼拝することによって本当の満足を得なさいと。私たちが喜ばないのはなぜでしょう？神を正しく見ようとしなからです。神との関係を正しく保ち続けようとしなからです。ダビデがその置かれた状況の中でも礼拝し、本当の満足を得たことは、私たちにもできることです。その秘訣は「礼拝への献身」です。それをダビデは私たちに教えてくれているのです。

不幸と思われるどのような状況にあつても喜んでいた信仰者たち、彼らは神を真に知り、神を礼拝することに献身してました。この同じ神が私にも臨んでくださることを覚え、真の礼拝者へと変えられて行きましょう。